



Title	言語・抒情詩・レトリック ドロステの詩の分析と解釈の試み
Author(s)	永谷, 益朗
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44477
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	なが 永 谷 たに ます 益 ます お 朗
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 7 3 1 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 14 年 10 月 1 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	言語・抒情詩・レトリック ドロステの詩の分析と解釈の試み
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 林 正則
	(副査) 教授 森谷 宇一 助教授 三谷 研爾

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ドロステ・ヒュルスホフ (Annette von Droste-Hülshoff, 1797-1848) の代表的な詩作品をレトリック分析の手法を用いて分析し、ドロステの詩業の意義を新たな視点から解き明かしたものである。そのさい研究の方法論上の前提として、反レトリックを鮮明にしたロマン派以降の「抒情詩とは詩人自身の感情や体験を直接に表白するもの」であるとする詩論を検証し、抒情詩とレトリックの関わりをその起源に遡って究明しようとしたものである。全体は、序論と結論を含む本論として7つの章、それに第8章「ドロステの詩のテキストと翻訳」、第9章「文献表」が添えられ、A4判 201 頁、400 字詰原稿用紙換算で約 1000 枚からなる。

第1章「序論—詩とレトリック」では、言語・抒情詩・レトリックをめぐって「抒情詩」論の歴史が検証され、抒情詩を「無意識の創造物」とするとするロマン派以降の概念は抒情詩のひとつの可能性を表しているに過ぎず、抒情詩とはむしろすぐれて「意識的な制作物 (Machwerk)」であること、そして言葉の「身振り」であるレトリックこそ「概念としての言葉」によっては伝えることができないものを伝える手段として抒情詩において決定的に重要な役割を果たしており、作品理解にあたって言葉の効果を分析する道具としてきわめて有効であることが明らかにされる。

第2章以下では、主にプレットの『レトリックとテキスト分析』に依拠して、ドロステの代表的な詩の分析を進める。

まず第2章では、「保守の立場からの傾向詩」と評される詩群「時代の絵」から3つの詩を選び、信仰や郷土愛といった伝統的虚構装置に懐疑を抱きつつも、なお伝統を保守し性急な改革を批判する「振り」をして聞き手を説得する、その「身振り」としてのレトリックを細部にわたって分析し、これらの詩作品が時代の進行とともにその直接的な訴えかけの目的を失ったとしても、「その修辞の身振りによって、言葉の芸術として」生命を失わないであろうとする。

第3章では、荒野の情景を描き出した3つの詩を取り上げ、それらの作品のいずれにおいても現実(啓蒙)と幻想(迷信)とが複雑、微妙に重なり合い、浸透し合い、対立し合っている様相が明らかにされ、「物語としての幻想」と「無意味としての現実」の図式の背後には神と世界への深刻な問いかけが潜んでいるのではないかと推測している。

第4章では、当時流行した牧歌というジャンルに属する詩で、一人の司祭の穏やかな一週間の日常を描いた『老司祭の週』が取り上げられる。日曜日から土曜日までの一週間の各曜日の日常風景が、牧歌特有の「細密描写」と曜日ごとに異なる韻律形式で描かれ、移ろいやすい幸福が循環する時間のうちに掬い上げられている消息が明らかにされ

ている。

第5章で扱われている詩篇『櫟いしの生け垣』は、話し手が櫟の生垣に向かって語りかける形を取っており、限りなく独白に近い言葉で語られたきわめて個人的な体験に根ざした心情の吐露である。「この心の直接性と無意識から創造されたものとして抒情詩」というロマン派の抒情詩を引き継ぐ作品も、しかし簡潔な言葉と隠喩によって行間と余白に心情を語らせるというレトリックの技法が縦横に駆使され、それによって個人的な体験が普遍性を獲得していることが示されている。

第6章では、生涯信仰と懐疑の間で苦悩し続けたドロステの晩年に属する三つの宗教詩が取り上げられる。いずれもが神の存在証明を意図した詩であり、眼前に展開する具体的な状況が「具現」の文体原理に基づいて叙述され、それを通して神の存在を「身体感覚」として「聞き手」と共有したいという強い願望が、レトリカルな表現技巧に込められていることが明らかにされる。

第7章では、以上の分析に基づいて、論理的なもののみによっては把握できない言葉の「身振り」を捉える道具として、多義的・多層的なドロステの詩の解明におけるレトリック分析の有効性と射程の大きさを確認している。

論文審査の結果の要旨

抒情詩とは詩人の感情・心情の直接的な表出であり心情や体験を歌うものである、とするドイツ古典主義・ロマン主義において形成された詩論は、それ以降、現代にいたるまで陰に陽に抒情詩の生産と受容を強力に呪縛してきた。そのために、ドロステ・ヒュルスホフの詩作品のように「純粋な表出の要素が少なく」、「歌えない(また歌にくい)」、レトリカルな要素に満ちた作品は、いわば抒情詩からの逸脱として、今日までその意義にふさわしく理解され評価されてきたとは言い難い。

本論文の第1の意義は、抒情詩とは何かという問いに真正面から取り組み、抒情詩とは「虚構の(fiktional)場」における発話であり、詩の話し手と聞き手は「虚構の場に設定された役割」なのだという論者の仮説を、ドロステの詩作品の分析によって説得的に実証してみせ、抒情詩理解の新たな可能性を見事に提示し得ている点である。

第2の意義は、抒情詩とレトリックの関係を言語の本質にまで遡って問い直し、レトリック分析の技法を自在に駆使して、抒情詩理解におけるレトリックの有効性を作品研究の実例において示している点である。

第3の意義は、保守主義的な「傾向詩」としてこれまで冷ややかな眼で見られることの多かったドロステの詩業を、レトリックという側面から再検討することでその多層的・多義的な実像を浮き彫りにし、新たな理解と評価の可能性を開いた点である。

ただ、序章の理論的考究では論述に行きつ戻りつが見られ、また2章以下のドロステ詩の分析においては、随所にはっとするような鮮やかな手際が示されている反面、ところによってやや表面的、形式主義的な分析に終わっている箇所もまま見られる点が惜まれる。

しかし、これらの点は本論文の学術的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。